

第 35 回 日本受精着床学会総会・学術講演会が、7 月 20 日・21 日の 2 日間にわたり、米子コンベンションセンター Big Ship にて開催されました。

当院から、院長、培養士 3 名が参加し、培養士 2 名が各 1 演題ずつ口頭発表をしました。

今回の学会では、興味深い演題が多数ありました。採卵周期に卵胞数が少ない症例や卵子が採取できにくい症例への刺激の方法や、反復不成功例への移植前に行う治療により、着床率が上がるという報告が目を引きました。また、胚をより鮮明に観察できるシステムの開発も進んでおり、より良い胚の選択ができるようになると思われました。それにより妊娠、出産あたりの移植回数が減らせられると期待します。当院でも使用しているタイムラプスでの解析の検討についても多く報告があり、当院のものと同様に、より良い胚の選択や評価ができるように、今後当院でも反映していきたいと思えます。

発表テーマ

『タイムラプスコアによる妊娠継続可能胚のセレクション』

『前培養液と胚培養液の組み合わせについての比較検討』

『タイムラプスコアによる妊娠継続可能胚のセレクション』

胚の動態観察が可能であるタイムラプスシステムを使用することにより、発育速度、分割方法や形態などを、当院独自の手法により評価して胚のスコアリングを行っています。当院のスコアリング方法では、最大 14 点であり、この点数が、移植に供する胚の選択の指標にもなります。

今回の発表では、スコアリングした胚とタイムラプスを用いていない従来通りの形態観察のみで評価した胚との移植後の臨床妊娠率、妊娠継続率、流産率を、比較検討を行いました。

流産率には有意差は認められないものの、臨床妊娠率、妊娠継続率では、タイムラプスコアが 6.0 点以上では従来法の胚よりも優位に高くなるが、5.9 点未満では、優位に低くなることがわかりました。

このことから、タイムラプスシステムを使用して胚培養を行った場合、タイムラプスコアが低い胚しか得られなかった場合は、胚移植をせず、再度採卵を行うという選択肢もあると提供することで、より早くに妊娠継続へつながる胚移植ができるのではないかと考えています。

『前培養液と胚培養液の組み合わせについての比較検討』

本来、体内で行われている受精や胚発育を体外で行うには、卵子、精子、そして胚を、いかにストレスをかけずに培養できるかが重要になります。それに伴い、培養液の開発や技術の向上により、体外でもより長く培養することが可能になりました。培養液は様々なメ

メーカーで販売されているので、成分や胚への効果は多種多様です。当院では、採卵から媒精までに使用する培養液(前培養液)と媒精から胚発育に使用する培養液(胚培養液)では異なるメーカーのものを使用しています。培養液の会社が違えば、それぞれの組成も浸透圧も様々です。培養液を変えるということは、培養液ごとの浸透圧の変化が卵子や胚へのダメージにならないかなどを考えてしまいます。

今回、当院では、多種多様な培養液の中から、前培養液、胚培養液を各 2 種類ずつ組み合わせて使用し培養液の違いによる胚の良好胚と胚盤胞率および良好胚盤胞率の検討を行いました。

当院での環境下においては、一番前培養液と胚培養液との組み合わせはメーカーを統一しなくても、胚発育が不良になることはありませんでした。この結果から、胚培養には浸透圧の違いよりも、各メーカー培養液成分についてきちんと核施設の環境下では何が適しているのかを知ることが大切だと考え、今後もより良い培養環境で培養できること、そして移植後の妊娠率や流産率も比較して更に検討していきます。